

Title	Indra SinhaのAnimal' s Peopleとボパール、水俣、太平洋核実験：地上60センチの目線で見えた世界
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 27-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88353">https://doi.org/10.18910/88353</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# Indra Sinha の *Animal's People* とボパール、水俣、太平洋核実験<sup>1</sup>

——地上 60 センチの目線で見た世界——

小 杉 世

## 1. はじめに

Indra Sinha (以降シンハ) は、イギリス人作家である母親とインド人海軍士官の間に生まれ、インドのボパール化学工場災害の被害者のための社会活動も長く行って来た。<sup>2</sup> *Animal's People* (2007) はインドの架空の町 Khaufpur を舞台として、あの夜の出来事とその後の町の人々の生活がある青年の視点から語る物語である。小説中で語られるあの夜とは、町の化学工場が「毒」を放出し、その夜だけで 3000 人を超える住民が亡くなり、州政府が認めているだけでも被害者数は 57 万人を超え<sup>3</sup>、多くの人々が後遺症を患うことになった事故の夜である。Madhya Pradesh 州の町 Bhopal (以降ボパール) で 1984 年 12 月に起きた合衆国の多国籍企業ユニオンカーバイド社の殺虫剤製造工場の毒性ガス (イソシアン酸メチル) 漏洩事故をもとにしている。小説の語り手は、その事故の数日前に生まれた孤児で、フランス人の修道女 Ma Franci を育ての親として町の貧民街に育った Animal (ヒンディー語で जानवर Jaanvar) と自称し、周りからもそう呼ばれている青年である。主人公 (語り手) は 6 歳のとき、首と両肩の燃えるような痛みと発熱を経て、背骨が委縮し「ヘアピン」(15) のように曲がって、2 足歩行ができなくなり、4 足歩行で生活している。この小説はその主人公 Animal が地上 60 センチの目線から見た世界を描く。<sup>4</sup>

Rob Nixon は放射能汚染や気候変動など「遅い暴力 (slow violence)」とよぶ長い時間をか

<sup>1</sup> 本稿は JSPS 科研費 (基盤 B、20H01245、代表: 松永京子) の助成を受けている。「グローバルイノベーション論」の授業でこの小説と一緒に読んだ院生たちとの議論のなかで考えたことに基づいている。本稿中の *Animal's People* からの引用頁数は英語版による。

<sup>2</sup> <https://literature.britishcouncil.org/writer/indra-sinha> 参照。

<sup>3</sup> 'Madhya Pradesh Government: Bhopal Gas Tragedy Relief and Rehabilitation Department, Bhopal' (<https://web.archive.org/web/20120518015922/http://www.mp.gov.in/bgttrdmp/facts.htm>) 参照。このデータによれば、2008 年 10 月 30 日時点でこれらの死傷者に支払われた補償金の総額は Rs.1548.46 crores だが、これを頭割りすると Rs. 26,959 (4 万円程度)、大学卒インド人の日系企業での初任給の月給とほぼ同額である (<https://sekai-ju.com/life/ind/carrier/india-income/>)。ちなみにガス放出時に亡くなった 3,787 人の死者に支払われた当初の補償金は上記の州政府サイトによれば一人当たり Rs. 10,000 で、さらに低い。事故関連死者数は、はっきりとはわからないが、25,000 人以上と想定されている (<https://www.bhopal.org/about-us/our-history/>)。

<sup>4</sup> 'The world of humans is meant to be viewed from eye level. Your eyes. Lift my head I'm staring into someone's crotch. Whole nother world it's, below the waist' (*Animal's People*, 2).

けてゆっくりと侵食する目に見えない環境の変化による影響を最も如実に受けるのは、その問題自体を生み出している先進国の裕福な人々でなく、植民地時代から長い搾取を経験してきた先住民コミュニティや、グローバリゼーションの経済構造のなかで底辺におかれる存在、移民労働者、難民たちであることを指摘した。Nixon はシンハのこの小説がネオリベラル・グローバリゼーションの「下腹部」を社会のアウトカーストの視点から探る作品と評する（‘Sinha probes the underbelly of neoliberal globalization from the vantage point of an indigent social outcast’ Nixon 46）。本稿では、シンハの小説を通して見えるグローバリゼーションの世界システムを、関連する作品や今日の状況を参照しながら検証する。

## 2. グローバリゼーションの世界システムと「ゴミの帝国主義」

Elizabeth DeLoughrey は貧困者や難民などの社会的弱者に対する暴力を批判するカリブのドミニカ共和国のアーティスト Tony Capellán がサント・ドミンゴの海岸で拾い集めたゴミをリサイクルして制作したインスタレーション ‘Mar Caribe (Caribbean Sea)’<sup>5</sup> に言及して、グローバリゼーションの一見境界のない人の流れを象徴する海にも難民など望まれない存在を絡めとり除去する有刺鉄線に象徴されるような境界があることを指摘した (DeLoughrey 109)。ハイチからの難民を収容したキューバのグアンタナモ米軍基地収容所や、中東から東南アジア経由でオーストラリアに難民受け入れを希望するボートピープルをナウルやパプアニューギニアのような太平洋島嶼部国家に設置した収容所で請け負わせるかわりに財政支援をするという「パシフィック・ソリューション」と呼ばれたオーストラリアの難民政策などもその典型である。<sup>6</sup> Capellán のインスタレーション ‘Mar Caribe’ の棘の冠ならぬ有刺鉄線の鼻緒のサンダルは、帝国の「廃物 (refuse)」を引き受ける第三世界（あるいは「廃物」にされる存在）が負う痛みを雄弁に語っている (小杉 2020)。核廃棄物やフールアウトを含む有害物質を帝国の周辺に位置する（旧）植民地の第三世界や先住民の土地に負わせる「ゴミの帝国主義 (waste imperialism)」 (DeLoughrey 115) は、核実験が行われた冷戦期に限らず、現在もその構造は続いている。DeLoughrey の指摘するグローバル経済の特徴である ‘(human) disposability’ (101) と、有害廃棄物などの「リスクのアウトソーシング」、 「ゴミの帝国主義」は、斎藤幸平がシュテファン・レーセニッヒ (Stephan Lessenich) に言及して論じる「外部化社会」 (斎藤 30) の問題であり、<sup>7</sup> Rob Nixon が ‘risk relocation’ あるいは ‘the transnational off-loading of risk’ (Nixon 46) と呼ぶものである。

冷戦期に太平洋地域その他で行われた核実験の影響は、被ばくや有害廃棄物による直接の健康被害にとどまらず、生活の変化がもたらした健康への影響は、現在も続いている。たとえば、第二次世界大戦後のアメリカによる軍事化によって、生活形態や食料が大きく

<sup>5</sup> 作品画像は、<https://risdmuseum.org/art-design/collection/mar-caribe-caribbean-sea-200510> 参照。

<sup>6</sup> オーストラリアの難民政策に関しては、ジョーデンズ (2018) を参照されたい。

<sup>7</sup> 第6回大阪大学豊中地区研究交流会のポスター発表「オセアニア海洋文化とモンゴル遊牧文化から SDGs を考える」 (小杉世・今岡良子、Remo 開催、2021年12月21日) の全体の考察点として小杉がイントロダクションでふれている。

変わったマーシャル諸島などにおいては、被ばくに起因する疾患に加えて、糖尿病などの基礎疾患を多く生み、そのことがアメリカ在住マーシャル人コミュニティにおける新型コロナウイルス感染者数と死者数の多さ<sup>8</sup> に関係していることが指摘されている例をみても、「帝国」による軍事的経済的支配が及ぼす影響のスパンの長さがわかる。また一方では、日本の高齢者のワクチン接種も始まらず、自宅療養中に死亡する患者が大阪で急増した 2020 年 4 月下旬から 5 月上旬の第 4 波の医療逼迫時に、先進国と第三世界とではワクチン供給にも格差があるなかで、マーシャル諸島では、国内での 18 歳以上のワクチン接種は 2021 年 1 月から開始、2020 年 4 月 19 日時点でのマジロ環礁・クワジェリン環礁の都市部の 18 歳以上のワクチン接種完了率は 61%、4 月上旬からは離島でのワクチン接種も進んでいた状況<sup>9</sup> を見れば、合衆国と自由連合協定を結んでいるマーシャル諸島がアメリカの軍事的な支配を受けるかわりに、強い供給パイプラインでつながれていることも如実に見える。

### 3. 帝国のホモ・サケル

シンハの小説 *Animal's People* を読んだとき頭に浮かんだのは、ニュージーランド在住サモア人舞台芸術家 Lemi Ponifasio の舞台上、しばしば登場する動物のように 4 足歩行する男の姿である。ときどき 2 本足で立ち上がっては言葉にならない言語でなにかわめき、やがて 4 本足に戻って静かに舞台上を通り過ぎていく。第一次世界大戦 100 周年の委嘱作品 *I AM* にあらわれるインドネシア人のダンサーが演じている 4 足歩行の男性は、戦争で流した血の責任から逃れるために人間であることをやめたかのように見える。グローバル経済や「帝国」の発展のために犠牲となる「帝国のホモ・サケル」について、別稿でオセアニアを例に論じているが、<sup>10</sup> ここではシンハの小説を例にとって考察したい。

「利益を内部に取り込み、リスクを外部化する」(‘internalize profits and externalize risks’ 52) 多国籍企業の「企業植民地主義」(‘corporate colonialism’ 52) の構造をシンハの描く Khaufpur にみる Rob Nixon は、チェルノブイリ原発事故後に導入された放射性燃料デブリ除去ロボットが機能しなくなったとき送りこまれた若者たちが「人間」としてではなく、‘biorobots’、すなわち、「使い捨て可能な部品」(‘expendable parts’ 54) として扱われたことに言及し、企業植民地主義の活動でリスクを負わされる第三世界の人々との関連性を指摘して、災害や事故の責任をのがれる企業の健忘症 ‘corporate amnesia’ (51) を批判する。

シンハの小説 *Animal's People* (2007) には、大災害を引き起こした事故の後、有害化学物質が放置されたまま廃墟と化したアメリカ資本の化学工場跡が描かれる。事故から 20 年経っても除染がなされていない事故現場は、Mark J. Rauzon が *Isles of Amnesia: The History,*

<sup>8</sup> “COVID-19 Disparities Among Marshallese Pacific Islanders” *Preventing Chronic Disease*, vol. 18, January 7, 2021, DOI: <http://dx.doi.org/10.5888/pcd18.200407>.

<sup>9</sup> <https://www.facebook.com/rmimoh/> 参照。小杉 (2021), p. 52.

<sup>10</sup> オセアニアの舞台芸術と造形芸術、詩のパフォーマンスにおけるホモ・サケルの表象については現在出版準備中の別稿「帝国のホモ・サケル——太平洋核実験をめぐる当事者性と芸術の想像力」で論じている。

*Geography and Restoration of America's Forgotten Pacific Islands* (2015) で論じた太平洋の忘却された島々の実験施設跡とも重なる。Animal によれば、Khaufpur のスラム街 Nutcracker の家並みそのものが文字通りカンパニ (Kampani) の残骸でできている ('Here and there are holes in the wall as if a giant has banged his fist through, it's where people have dug out bricks for their houses, our end of the Nutcracker is made mostly of death factory' 29)。これは多くの第三世界や先住民コミュニティにおいて珍しいことでない。オーストラリアの中国系アボリジナル作家 Alexis Wright の長編小説 *Carpentaria* (2006) のアボリジナルの主人公 Normal Phantom はゴミの山から拾ってきた屑で自分の家 ('Number One house') を建てる。現実世界でも、たとえば冷戦期に英米の核実験場となったキリバス共和国クリスマス島では、実験後 40 年以上も実質的な除染が行われないまま、島民たちは島に放置されたあらゆる廃棄物を利用して生活してきた。新しい村に電気を引くとき、核実験のモニタリング・サイト (放射線測定施設) の電線を再利用したという技師もいたし、立ち入り禁止区域のコンクリート盤を砕いて、漁網の重石にしたという男性もいる。<sup>11</sup> 軍用車の廃車の山のそばの池で、人々は魚を釣っていたし、加鉛燃料タンクがあった地区の地下水は今も飲用できないが、実験を行った国は、島に残された廃棄物が環境や人に与えたかもしれない影響について認めていない。

シンハの小説中の工場の敷地は事故から 20 年経ってもなお、昆虫が棲息できない土壌である ('Listen, how quiet it's. No bird song. No hoppers in the grass. No bee hum. Insects can't survive here. Wonderful poisons the Kampani made, so good it's impossible to get rid of them, after all these years they're still doing their work.' 29)。かつて 'the Voice of Khaufpur' (33) とよばれた歌手の Pandit Somraj は有毒ガスで肺をやられて歌声を失い、住民たちは汚染された水を飲み続け ('Our wells are full of poison. It's in the soil, water, in our blood, it's in our milk' 107-108)、Animal もまだ背骨がまっすぐだった子供のころ、工場の裏手の池に飛び込んで遊んでいた。小説には、自らの母乳を赤ん坊に与えずにしぼって捨てる母親が登場するが、実際にボパールでは、母親たちの母乳から鉛や水銀が検出されている。<sup>12</sup> カンパニの弁護士に向かって登場人物の老女 Gargi は、'You were making poisons to kill insects, but you killed us instead. I would like to ask, was there ever much difference, to you?' (306) と皮肉を述べる。

化学工場事故の後遺症で直立歩行できなくなって「人間」でなくなり、雌の野良犬 Jara を相棒として、有害物資が残ったままの工場の廃墟のジャングルをねぐらにする Animal、そして、カンパニの「毒」で虫けらのように生命を奪われ一掃されたスラムの住民たちは、グローバリゼーション時代の「帝国のホモ・サケル」にほかならない。「帝国」のグローバル資本主義経済活動の負債を負わされる第三世界の存在は、Animal がみる夢の光景にも示唆される。夢のなかで、Animal の住む Khaufpur の貧困地区 Nutcracker の中心に向かう極楽

<sup>11</sup> キリバス共和国クリスマス島で筆者が行った 2016～19 年の現地調査とインタビューに基づく。

<sup>12</sup> 'Testing published in a 2002 report revealed poisons such as 1,3,5 trichlorobenzene, dichloromethane, chloroform, lead and mercury in the breast milk of nursing women' ('Why Bhopal Matters', <https://www.bhopal.net/why-bhopal-matters-to-you-2/>).

横丁 (Paradise Alley) を歩く赤いターバンを巻いた Zafar は、「光り輝く世界」(‘a shining world, blue as a flycatcher’s wing, criss-crossed by tiny lines’ 83) を背負い、「世界の痛みの重み」(‘his heavy burden of the world’s pain’ 83) で、Animal 自身の背中のように腰が二つ折りに曲がってしまっている。Zafar が背負っている青く輝く地球は、理想主義者の Zafar が守ろうとする世界の姿でもあるが、同時に、先進国が享受する美しい世界でもあり、実際にその痛みを負うのは Khaufpur の貧民街の人間たちであることを示している。そして活動家の Zafar はそれらの人々の苦しみを一身に背負おうとしているのである。

#### 4. 忘却から生命を甦らせるための語り

シンハのこの小説は、オーストラリア (‘Ostrali’) からやってきた ‘the Kakadu jarnalis’ (カカドゥ国立公園からきたジャーナリスト) が Animal に渡したテープレコーダーで、Animal が録音した物語を書き起こしたものという想定で書かれており、章のタイトルも Tape 1 から Tape 23 まで録音テープ番号となっている。小説の冒頭では、化学工場事故の大惨事の被害者のライフストーリーを探し求めて Khaufpur を訪れた現地語のわからないオーストラリア人ジャーナリストが、事故の後遺症で背骨が委縮し、動物のように手足をついて歩く「人間」でなくなった青年 Animal を「発見」する場面が、Animal の視点から容赦ない辛辣な皮肉をこめて描かれる。観察記述する側のはずのジャーナリストが観察記述される側となり、一種の逆エスノグラフィーになっている。Animal はジャーナリストが自分を見たとき「目を輝かせ」(4) たのを見逃さず、血の匂いを嗅ぎつけてやってくる秃鷹にたとえる。

When you saw me, your eyes lit up. Of course, you tried to hide it. Instantly you became all solemn. . . . You were like all the others, come to suck our stories from us, so strangers in far off countries can marvel there’s so much pain in the world. Like vultures are you jarnaliss. Somewhere a bad thing happens, tears like rain in the wind, and look, here you come, drawn by the smell of blood. (4-5)

「被害者」の語りを収集して生業を立てるジャーナリストや災害研究を行う研究者の行為のいかがわしさと他者表象の問題をシンハの小説は容赦なく皮肉に批判する。核実験被害者の語りを聴き取った経験のある筆者も、シンハの辛辣な批判には、耳の痛い思いがする。派遣ジャーナリストのボスである編集者のことを指して、「地球の裏側」にいる外国人が Khaufpur について何を書くかを定めるなど馬鹿げている (‘Makes no sense. How can foreigners at the world’s other end, who’ve never set foot in Khaufpur, decide what’s to be said about this place?’ 9) という Animal は、あの夜について語ることを拒否して、テープに関係のない卑猥なことばかりを語り、Animal を利用して金儲けをしようとするケバブ売りの主人 Chunaram を激怒させる。結局、ジャーナリストは滞在期間中に Animal から話を聴き出すことができず、Animal が気に入った半ズボン (Kakadu pants) と Zippo ライターを贈り、

テープレコーダーを残して去っていく。

この小説は、それから時が経ち、物語中で語られる一連の出来事を経て成長した Animal が、「頭のなかの声が狂ったように喚きだした」(‘my voices . . . began their crazy hissing’ 365) とき、蠍が棲む壁の穴に詰め込んで忘れていたテープレコーダーを思い出して録音した話を英語で出版した本という設定になっている。語り始めた途端に Animal には、死んだ少女 Aliya の声が聞こえ、Ma Franci の姿が見える。

When I started speaking, when I heard dead Aliya’s voice calling, it was like she and the others who are no more came back to be with me. My dear ones, heroes of my heart. Eyes, I can’t tell you how I miss them. . . . They’ve been here through every minute of this telling. Ma’s here with me now, sitting smiling she’s, calling me son. (365)

Animal は統合失調症の患者のように、そこにいない人々の声を聞いたりするため、半分、頭がおかしいと周りの人々から思われているが、彼が聞く声は、死者たちの声、そして、自分自身のなかの葛藤の声であることがわかる。グローバリゼーションの忘却 (amnesia) の力の支配する世界の片隅で、Animal は自分の仲間 (Animal’s People) について語ることで彼らの生を蘇らせる。

ナウタパとよばれる異常な暑さが頂点に達し、ハンガーストライキで Zafar が死んだという噂が流れて民衆の暴動が起こるなか、ダチュラ (チョウセンアサガオ) の丸薬の幻覚作用で朦朧とした意識の Animal が、「瓶のなかの親友」(‘Khā-in-the-Jar’) とよぶアルコール漬けの奇形の胎児を Zippo ライターで燃やしたことで起こった (と思われる) 工場火災が「あの夜」の再来ともいえる二次災害を引き起こした後、<sup>13</sup> Khaufpur の町に生きて戻った Animal は、活動家の Zafar が「無の力が敵を打ち負かした」(‘The power of nothing rose up and destroyed our enemies’ 358) と述べるのに対して、実のところ、人々の生活は少しも変わっていないこと、カンパニの工場は相変わらずそこにあり、公聴会は延期されて、カンパニの代表者は相変わらず法廷に現れないことにふれている。

So I got it back, my familiar life, I have it back. Everything the same, yet everything changed. . . . Life goes on. It will take time, so we’re told, to appoint a new judge in the case, the hearing’s again been postponed, the Kampani’s still trying to find ways to avoid appearing, but Zafar is confident we’ll get them in the end. There is still sickness all over Khaufpur. . . . the factory is still there, blackened by fire it’s, but the grass is growing again, and the charred jungle is pushing out green shoots. Moons play hide and seek in the pipework of the poison khana, still the foreign jarnaliss

<sup>13</sup> 工場の火災の原因は小説では語られないが、Animal が瓶詰の胎児を燃やしたと記憶している森のなかと、工場の敷地のジャングルが重ねられており、‘After the factory went up, poison smoke came. Ma said it would be like that night all over again. . . . That fire was hell itself. It was burning my back as I ran away from the factory’ (359) という Animal の語りからもそのことが推測できる。

come. (364-365)

小説では、工場火災時には、過去の災害から学んだ Khaufpur の住民たちがどうしてよいのかを心得ていて、人々を逃がそうと奔走した Ma Franci とその親友の老女 Huriya、その夫で亡くなった孫娘 Aliya のそばにとどまった盲目の老人 Hanif の3人以外に命を落とした者はいなかったという設定になっている。しかし、現実ではそのような二次災害が起こったら、おそらく小説の終章前の暗転した終末の光景、森に逃げた Animal が「あの夜」のように何千人もの人々が死に、自分や他のみんなも死んで天国にいるのだと思ひこんだその錯覚のほうが、現実になっていたかもしれない。ボパール化学工場事故で子供の被害が大きかったのは漏洩ガスが重く地表面近くのガス濃度が高かったため(古積 237)と言われており、2足歩行できない Animal は実際なら最も有毒ガスの被害を受けることになる。

Nilanjana S. Roy が書評で言及するボパール被害者で活動家の Sunil Kumar (シンハは Kumar と活動を共にしており、Kumar もまた Jaanvar=Animal と呼ばれていた)<sup>14</sup> は、精神障害を患い、「声を聞く」ようになり、この小説が出版される前年の 2006 年 1 月に自らの命を絶っている。<sup>15</sup> また、Daniel Berehulak が 2009 年に撮影した一連のルポルタージュ写真 ‘Bhopal Twenty Five Years On From Union Carbide Disaster’ で紹介されている 15 歳の少年 Sachin Kumar は、生まれながらの障がいによって立つて歩くことができず、四つん這いでクリケットを行う姿が撮影されているが、ルポルタージュの文章には、‘Sachin’s health has turned for the worse and his legs, now covered with open sores, restrict him from travelling to the major road where the Chingari Trust bus can pick him up for daily treatment’ とあり、その痛々しい膝の傷の写真も撮影されている。4 足歩行で生活しながらも、木に登ったり、自由に地面を駆け回る小説中の Animal のような力強さはない。<sup>16</sup>

シンハは小説中の Animal に、現実のボパールの被害者たちが持ち得ないような特別な力強さを付与している。登場人物の Nisha がいうように、Animal (Jaanvar) は「生命力 (jaan)」にあふれている。Nutcracker の路地裏を知りつくし、‘my kingdom’ (29) とよぶ Animal は、人間の下腹部より低い目線で世界を観察しながらも、その語りの過程において、一種の authorship を発揮し、俯瞰的な視点もまた獲得していく。<sup>17</sup> 小説の最後で Animal は ‘I am Animal fierce and free / in all the world is none like me’ と誇り高く歌い、‘Remember me. All things pass, but the poor remain. We are the people of the Apokalis. Tomorrow there will be more of us’ (366) と語りを締めくくる。先に述べたような現実のボパール被害者の存在を思うとき、読者である我々は、ボパールの多くの被害者がそうであるように、この Animal の生命もい

<sup>14</sup> Nilanjana S. Roy, ‘Bhopal Revisited: Animal’s Story’ *Business Standard*, updated June 14, 2013 ([https://www.business-standard.com/article/opinion/bhopal-revisited-animal-s-story-107081401098\\_1.html](https://www.business-standard.com/article/opinion/bhopal-revisited-animal-s-story-107081401098_1.html)).

<sup>15</sup> K. S. Shaini, ‘Bhopal activist dies with broken dreams’, BBC News, updated 17 August 2006 ([http://news.bbc.co.uk/2/hi/south\\_asia/4795771.stm](http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/4795771.stm)).

<sup>16</sup> このウェブサイトには Sachin Kumar の写真が複数掲載されている (<https://www.gettyimages.co.jp/%E5%86%99%E7%9C%9F/bhopal-twenty-five-years-on-from-union-carbide-disaster>).

<sup>17</sup> Khaufpur の夜明けの町に想像力を馳せるときには、鳥の視点から町をみている。



つまで続くかわからないことを感じるのであり、「自分のことを覚えていてほしい」というその言葉に、彼自身が頭のなかに聴く死者たちの声のこだまを聴くことになる。

## 5. 「人間」とは何か——狭間にあること、境界性

AF (artificial friend) と呼ばれる人工知能ロボットの視点から人間の世界を描いたカズオ・イシグロの小説 *Klara and the Sun* (2021) がそうであるように、シンハのこの小説も、人間とは何かについて問いかけている。‘I used to be human once’ (1) と語り始める主人公（語り手）Animal は、「二度と人間にはなりたくない」（‘I no longer want to be human’ 1）と言いつつも、2本足で立つものには何にでも（壁にたてかけた梯子にすら）激しい嫉妬を覚え、失恋で自暴自棄になりながらも、生命に対する捨てきれない愛着をもっている。また、語り手 Animal は、「人間ではない」存在として、社会の外に自らを置くことによって、容赦のない批判や怒りの感情の吐露を可能にしており、より表現の自由を獲得している。

ボパール工場周辺の地域で被害にあった住民の多くはマイノリティのムスリムであり、<sup>18</sup> 小説中の活動家 Zafar もイスラム教徒だが、この小説には境界を超える存在が何人か描かれる。Khaufpur で人生のほとんどを過ごし、フランスに連れ戻しに訪れた神父から、ブルカを被って変装して逃げて Nutcracker にとどまったフランス人の修道女 Ma Franci もその一人である。Ma Franci は、「あの夜」の事故の後、ヒンディー語を話せなくなり、フランス語しか「人間の言語」として認識できなくなるが、二次災害から住民たちを救おうと自らの命を犠牲にした最期の夜、完璧な Khaufpur 訛りのヒンディー語（‘clear and perfect Khaufpuri’ 363）を取り戻す。ヨハネ黙示録の終末の世界（‘Apokalis’ 333）を信じる Ma Franci は、終末のときが来れば、壁の穴に棲む蠍も巨大になって、悪い人間たちを毒針で刺すのだという。終末のヴィジョンにとりつかれ、「木の根っこ」のように絡んだ髪 (324) の Ma Franci は、工場火災の夜には、Animal の目にヒンズー教の破壊神 Kali Ma (333) の姿と重なってみえる。

Animal は「人間」でも「動物」でもなく、<sup>19</sup> また、ヒンズー教徒でもイスラム教徒でもキリスト教徒でもないが、貧民街に生まれ育ちながらも、頭がよく、英語とフランス語を理解し、様々な人々の間を自由に行き来する。Animal がコミュニケーションをはかるのは、人間だけではなく、雌の野良犬の相棒 Jara をはじめ、「動物や鳥、木々や岩の考えていることがわかる」(8) という。<sup>20</sup> 小説の結末では、Animal はアメリカで脊髄の手術を受ける機会を提供されるが、手術を受けず、売春宿に売られた幼馴染の Anjali を、Zafar のもついで働いて貯めたお金で身請けし、Animal のまま生きることを選ぶ。

石牟礼道子が『苦海浄土——わが水俣病』（1969）で描く水俣病患者の坂上ゆきは、誰も見ていない部屋で尻を突き出して四つん這いになって腕に口を近づけ、汁を自力ですする

<sup>18</sup> ‘Why Bhopal Matters’ (<https://www.bhopal.net/why-bhopal-matters-to-you-2/>).

<sup>19</sup> ‘neither man am I nor beast. I don’t know what is being beaten here. If they kill me what will die?’ (313).

<sup>20</sup> Shunqing Cao (2020) も Animal が多言語を話し、越境性をもつことに言及している（‘Animal . . . shuttles back and forth between the human and nonhuman world’ p.72）。

自己の姿をおかしく思いながらも、変形した身体で逞しく生きる創意工夫に誇りを示しているが、<sup>21</sup> シンハの小説の4足歩行の背骨の曲がった *Animal* も唯一の存在であることに誇りを持ち、実にたくましく生きている。その「人間性」の肯定は、石牟礼の文学にも通じるものがある。『苦海浄土』の観察者としての語り手は「わたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐え難かった」(147) と語るが、ゆきの一人称の語りは、次のように述べる。

自分の体に二本の足がちゃんについて、その二本の足でちゃんと体を支えて踏んばって立って、自分の体に二本の腕のついて、その自分の腕で櫓を漕いで、あをさをとりに行くこうごたるばい。(168)

うちゃやっぱり、ほかのもんに生まれ替わらず、人間に生まれ替わってきたがよか。うちゃもういっぺん、じいちゃんと舟で海に行こうごたる。(185)

## 6. Khaufpur はあらゆるところに存在する

シンハの *Animal's People* の舞台となる架空の町 Khaufpur は先にも述べたように、ボパールを暗に示唆しているが、同時にこの架空の町は、小説中の活動家 Zafar も述べるように、どこにでも存在する ('Is Khaufpur the only poisoned city? It is not. There are others and each one of has its own Zafar. There'll be a Zafar in Mexico city. . . and there are the Zafar of Minamata and Seveso. . .' 296)。たとえば、冷戦期の核実験場となったマーシャル諸島をはじめとする被ばく地が、また、「帝国」同士の冷戦の戦場となり枯葉剤 Agent Orange の健康被害を地元住民と従軍兵が被ったベトナムが、そして、近代化の副産物ともいえる公害を経験した水俣や、チェルノブイリや福島などの原発事故の影響を受ける世界の様々な都市の姿が重なる。

*Animal* が「瓶のなかの親友」とよび、対話をかわす診療所の棚に置かれたアルコール漬けの双頭の胎児は、政府の病院がこれらの胎児のサンプルを破棄することにしたとき Elli が自分の診療所に引き取ったという経緯を *Animal* に語る。「彼らは20年経っても何も学ばなかった。・・・僕たちはもうお払い箱で焼却炉行きになるはずだった」 ('Hospital decided to chuck us out. After twenty fucking years nothing did they learn from us except that when you poison people bad things happen. No longer wanted we're, to the incinerator we'd have gone' 138)。診療所の棚に保管された瓶詰の一眼や双頭の胎児たちは、ボパール化学工場事故後に多く発生した死産した奇形児たちのアルコール漬け標本（ボパール化学工場事故関係の写真にも登場する）であり、同時に、セミパラチンスクやマーシャル諸島など核実験の影響で生まれた

---

<sup>21</sup> 「いやあ、おかしかなあ・・・うちゃこの前えらい発明ばして。あんた、人間も這うてくわるととばい。四つん這いで。あのな、うちゃこの前、おつゆば一人で吸うてみた。・・・こうして手ばついて、尻ばっ立ってて、這うて、口ば茶碗にもっていった。手ば使わんで口を持っていて吸えば、ちっとは食べられたばい。おかしゅうもあり、うれしゅうもあり、あさましかなあ。扉閉めてもろうて今から先、這うて食おうか。あっはっはっはっ」(『苦海浄土』156-157)。このくだりについては、Yamada (2012) の議論を参照されたい。

骨のない奇形の胎児 (jellyfish babies) を連想させる。

Khaufpur の Elli の診療所の書棚には、*Veterans and Agent Orange* というタイトルの本があり (137)、ベトナム戦争で使用された枯葉剤 Agent Orange が、地元住民や兵士たちに大きな被害をもたらしたことから、ユニオンカーバイド社が製造する殺虫剤がガス漏れ事故によって虫ではなく人を大量に殺すことになったこととの関連性を示唆している。Jennifer Wenzel が指摘するように、ユニオンカーバイドを買収し子会社としたダウ・ケミカル (Dow Chemical) は、ベトナム戦争のためにナパームと枯葉剤 Agent Orange を生産供給していた。オーストラリア人のジャーナリストが *Animal* に残して行った Zippo ライターに刻まれた Phuoc Tuy という文字を *Animal* はジャーナリストの名前だと勘違いするが、南ベトナムの Phuoc Tuy はベトナム戦争でオーストラリア軍 (the 1st Australian Task Force) の戦略地域となった州であり、Wenzel が指摘するように、Agent Orange をはじめとする枯葉剤が大量に使用された地域でもある。<sup>22</sup>

Khaufpur で無料の診療所を営む医師の Elli はペンシルベニア州コーツヴィル (Coatesville) という鉄鋼業の街の出身で、父親も製鋼工場の地下 12 メートルの溶鉱炉のはざまの危険な持ち場、‘HELL HOLE’ (201) と呼ばれるブリキの小部屋で働く技師だった。Elli は地元の退役軍人のための病院で働いていたとき、ベトナム戦争の後遺症で、製鋼工場の水蒸気の爆音と圧搾機の音がジャングルの上空を飛ぶ軍用ヘリコプター (Hueys) のタービンの音に聞こえて耐え難いと語っていた患者の言葉を記憶している (201)。Elli の父親は「アメリカを建てたのは我々で、世界貿易センターも我々の鉄鋼でできている」(201)<sup>23</sup> と語っていたが、コーツヴィルの Lukens Steel Company は、1978 年に建設された世界貿易センタービルの鉄鋼のみならず、第二次世界大戦から湾岸戦争へと向かう時期にアメリカの軍需を支え、原子力空母艦やエイブラムス装甲戦車、弾道ミサイル、潜水艦などのための鋼鉄を生産してきた鉄鋼会社のひとつであることを考えれば、ベトナム戦争の PTSD の患者が製鋼工場の重機の音に軍用ヘリコプターの音を聞くのは、単なる音の類似だけではない。

Phuoc Tuy という生産地名が刻まれた Zippo をもっているジャーナリストはおそらく、ベトナム戦争に従軍したか、取材で訪れたものと推測されるが、<sup>24</sup> このジャーナリストが ‘the Kakadu jarnalis’ とよばれているのもまた重要である。ノーザンテリトリーのカカドゥ国立公園はアボリジナルの土地であり、国立公園の敷地内にあるレンジャーウラン鉱山は、長年にわたって大量の汚染水漏れがあったことが指摘されており、周辺のアボリジナルの土地や川に汚染物質が流れ込む事故が何度も起こっているからだ (Kosugi 2018: 143, 156)。

シンハが *Animal's People* の後日譚として発表した短編 ‘Animal in Bhopal’ (2009) は、小説

<sup>22</sup> ‘Between 1966 and 1968, no less than 202,910 gallons of Agent Orange were sprayed over Phuoc Tuy, in addition to 156,750 gallons of Agent White and 2,700 gallons of Agent Blue’ (Wenzel 296-297). ‘Dow Chemical was a major, sometimes exclusive, military supplier of napalm and the herbicides Agent Orange and Agent White’ (Wenzel 239).

<sup>23</sup> 小説では世界貿易センターが 9.11 で崩壊する映像のテレビ放送が *Animal* の視点で描かれる。

<sup>24</sup> 小説中の Zippo ライターについて、Jennifer Wenzel (2020) はジャーナリスト自身がベトナム従軍者であり、Agent Orange の影響を受けている可能性があるとして解している (Wenzel 296)。

の出版後、有名になった *Animal* が文学祭に招待されて Khaufpur の近くの都市ボパールを訪ねるという設定になっており、Khaufpur に似た町は世界のいたるところにあること、水俣、ベトナム、広島、長崎などの都市の名が言及される。そして、Khaufpur と同じようなことが起こったボパールのことを短編中の *Animal* は知らず、‘How come I’ve never heard of it?’ と尋ねる *Animal* に Zafar は ‘You and ninety-nine percent of the world. . . either have not heard, or have forgotten’ と答える。

‘There are many places like Khaufpur,’ says Zafar. ‘Some look much like our city, others quite different, but in each the suffering of people, the diseases, and the causes, are the same.’ He rattles off a list of names I’ve often enough heard before – Minamata, Seveso, Chernobyl, Halabja, Vietnam, Hiroshima, Nagasaki, Toulouse, Falluja.

帝国や企業の「健忘症」によって忘れ去られた人々が、世界のあらゆるところに存在する。そして、*Animal* が小説の締めくくりで述べるように、増え続けているのだ。

「敵の顔を見たい」という Zafar に対して、夢のなかの鴉は「カンパニには顔がない」(‘The Kampani has no face’ 229) と答える。

The crow says, ‘Behold, the Kampani. On its roof are soldiers with guns. Tanks patrol its foot. Jets fly over leaving criss-cross trails and its basements contain bunkers full of atomic bombs. From this building the Kampani controls its factories all over the world. It’s stuffed with banknotes, it is the counting house for the Kampani’s wealth. One floor of the building is reserved for the Kampani’s three-and-thirty thousand lawyers. Another is for doctors doing research to prove that the Kampani’s many accidents have caused no harm to anyone. On yet another engineers design plants that are cheap to make and run. Chemists on a higher floor are experimenting with poisons, mixing them up to see which most efficiently kill. One floor is devoted to living things waiting in cages to be killed. . . . It is the job of the PR people to tell the world how good and caring and responsible the Kampani is. (228-229) (下線筆者)

Zafar がみる荒唐無稽な「顔のない」カンパニの悪夢は、先に述べたダウ・ケミカルのようなグローバル企業の世界システムを揶揄するものであり、これらのグローバル企業やアメリカを支えるコーツヴィルの鉄鋼産業もまた、軍需にも深く関係してきたことを考えれば、「銃を持つ兵士」と「戦車」に守られ、「地下に核爆弾を貯蔵する」カンパニというのは、そう荒唐無稽な想像でもないのかもしれない。

## 7. おわりに

以上みてきたように、インドラ・シンハの小説は、グローバリゼーションの影響を受け

る第三世界の日常社会を、地表 60 センチの目線から辛辣な批判とユーモアで描いている。

Rob Nixon は環境人文学の著名な著書となった *Slow Violence and the Environmentalism of the Poor* (2011) の前書きで、Edward W. Said の 2003 年のエッセイの結びの文章を引いている。Nixon の引用は、下線部である。

And lastly, most important, humanism is the only and I would go so far as saying the final resistance we have against the inhuman practices and injustices that disfigure human history. We are today abetted by the enormously encouraging democratic field of cyberspace, open to all users in ways undreamt of by earlier generations. . . . The world-wide protests before the war began in Iraq would not have been possible were it not for the existence of alternative communities all across the world, informed by alternative information, and keenly aware of the environmental, human rights, and libertarian impulses that bind us together in this tiny planet.

サイードが上記で述べているのは、イラク戦争への世界規模の批判の声もサイバースペース上での国境を越えたオルタナティブなコミュニティの存在がなければ可能にはならなかったということだが、今日も世界各地で起きている紛争に対しても、同様のことがいえるだろう。また、昨今のコロナ禍で様々な国際集会在がオンライン化されるなか、サイバースペースが行動の場として益々重要性をもつようになった。気候変動をめぐる国際集会在も、北半球の代表者が中心の公的組織以外に、太平洋島嶼部出身のアーティストや詩人、活動家が主体となった国際集会在もこの 2 年の間に活発に行われている。そのようなオルタナティブな声が世界で「聴かれる」必要性が益々今日重要となっている。

#### 引用文献

Cao, Shunqing. 'Disabled and vulnerable bodies in Indra Sinha's *Animal's People*: transcending the human and nonhuman world'. *Neohelicon*, vol. 47, 2020, pp. 67-74.

<https://doi.org/10.1007/s11059-020-00535-0>

DeLoughrey, Elizabeth. *Allegories of the Anthropocene*. Duke UP, 2019.

Kosugi, Sei. 'Survival, Environment and Creativity in a Global Age: Alexis Wright's *Carpentaria*'. *Indigenous Transnationalism: Essays on Carpentaria*, edited by Lynda Ng, Giramondo Publishing, 2018, pp. 138-161.

Nixon, Rob. 'Slow Violence, Neoliberalism, and Environmental Picaresque.' *Slow Violence and the Environmentalism of the Poor*. Harvard UP, 2011, pp. 45-67.

Rauzon, Mark J. *Isles of Amnesia: The History, Geography and Restoration of America's Forgotten Pacific Islands*. U of Hawai'i P, 2015.

Said, Edward. 'Orientalism' *Counterpunch*. August 2003.

<https://www.counterpunch.org/2003/08/05/orientalism/print/>

Sinha, Indra. 'Animal in Bhopal' *Himāl Southasian*, December 1, 2009.

<https://www.himalmag.com/animal-in-bhopal/>

---. *Animal's People*. Simon & Schuster, 2007. [インドラ・シンハ『アニマルズ・ピープル』  
谷崎由依訳、早川書房、2011]

Wenzel, Jennifer. *The Disposition of Nature*. Fordham UP, 2020.

Yamada, Yuzo. 'Far West after Industrialization: Gwyn Thomas and Ishimure Michiko'. *Raymond Williams Kenkyu*, Special Issue, 2012, pp. 23-38.

石牟礼道子『苦海浄土——わが水俣病』講談社文庫、2018.

小杉世「マーシャル諸島のコミュニティ映画——ミクロネシアの波を世界へ——」『言語文化共同研究プロジェクト2020 : Cultural Formation Studies III』大阪大学大学院言語文化研究科、2021年5月、pp. 51-63.

---. 「Elizabeth M. DeLoughrey, *Allegories of the Anthropocene* (Duke University Press, 2019)」(書評)『ヴァージニア・ウルフ研究』第37号、日本ヴァージニア・ウルフ協会、2020年12月、pp. 150-155.

古積博「インド・ボパール事故から20年あまり経て—その1—」『安全工学』46巻4号、  
pp. 232-238. [https://doi.org/10.18943/safety.46.4\\_232](https://doi.org/10.18943/safety.46.4_232)

斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書、2020.

ジョーデンス、アン=マリー『希望 オーストラリアに来た難民と支援者の語り——多文化国家の難民受け入れと定住の歴史』加藤めぐみ訳、明石書店、2018.